

野の花のように……

川村益子姉を偲んで

戸山恵子

(会員 佐伯市匠南区二一五)

二〇〇三年十二月二十三日、日本キリスト教団佐伯教会(市内、中村北町)で、川村益子姉の葬儀が行われました。

二十一日、クリスマス祝会の最中にもたらされた訃報。その何日か前、病床を訪れた時は、二十四日のクリスマス礼拝には教会に行けそうだと、笑いながら言っていたのに……。

前夜式(通夜にあたる)、それに続く葬儀は、当教会で、彼女らしく慎ましいながら、花いっぱい飾られた祭壇に、彼女との数十年の交わりを偲びつつ、私も献花しました。

川村のおばあさんの八十五年の生涯の物語は、折に触れては彼女自身が語ってくれていました。……が、生いたちから終戦まで三十分、それに続く、ご主人の死からの苦勞話が三十分と、それは、それは長く、あああ、又始まったと苦笑いしながら聞いていたものでしたが、亡くなった今となっては、もともと聞いておけばよかった。記録に残しておけばよかったと、悔やまれることが山ほどあり、残念でなりません。

特に、当教会では、創立百二十周年記念誌の制作中であり、私も編集委員として、いわゆる戦時中のキリスト教が、いかにして体制の中に組み込まれていったか、おばあさんの話の中にあつた「宮城礼拝」というものが行われていたのか等、お元気になつたら書きとめておこうとしたことも、できずじまいに終わってしまいました。

おばあさんは、大正九年生まれの八十五歳。昭和十三年、十八歳の時に洗礼を受けたそうです。

昭和十八年の大洪水の様子は、「ノアの洪水もこんなのか」と思うほどと言っていました。五年前に

会堂改築した時の天井の染みが、それを物語っていました。

戦後は、あの独歩の恋人だったといわれる富永トミさんも電車で教会に通われていたこと。後に、日本のパウロと言われた富永徳磨。その妹である彼女は一生独身で通し、兄の家庭と宣教活動を助けたと言います。

明治二十四年に洗礼を受けた彼は、明治二十六年の九月に、鶴谷学館の教師として招かれた国木田独歩と師弟の關係になり、教会の集會に熱心に出席していたと、当教会の信徒第一号である薬師寺育三氏の姪ごさんから、川村のおばあさんは聞いたことがあると語っていました。その頃の教会は、今の増村医院の所で、玄關に「基督教會」という大きな提灯をぶらさげていたことも。

その後、富永徳磨は、独歩と共に上京し、東京神学校の教授となり本郷駒込基督教會という独立自給の教会を建ちあげ、数々の文筆活動もしていきました。その彼と妹が、佐伯出身であるということは案外知られていないのでは……。

私も、最晩年のトミさんを、佐伯老人ホーム（今の敬愛園）にお訪ねしたことがあります。昭和四十一年、八十九歳で亡くなった方です。

昭和二十三年、あの賀川豊彦講演會に、おばあさんもトミさんも出席されたこと、昭和二十五年には、社会党委員長 片山哲氏が教会の講壇に立ったこと、等々おばあさんは、淡々と語ってくれました。

葬儀で歌われたおばあさんの愛唱歌は、賛美歌三二〇番と三五五番でした。三二〇番は、あの映画「タイタニック」で有名になった曲。そして三五五番は一九二一年（大正十年）宮川勇牧師が、佐伯教会で作詞した曲です。特に二番は城山から見た佐伯町の光景だと言われています。我々佐伯市民にとって、全国・全世界で歌い継がれている賛美歌の中に、佐伯の事が詠まれている事、とても誇りに思っています。

おばあさんは、昨年九月に入院。小雨の中を駆けつけた時、一緒に口ずさんだのがこの曲でした。

実子に恵まれなかつたおばあさん。お見舞いのた

びに「わたしや、寂しゆうないでエ、聖書の言葉はス
ラストラ出るし、賛美歌は何時でも心の中で歌って
るよォ」と逆に励まされた三ヶ月間。

あまりに無名で、あまりにひっそりと亡くなった、
川村のおばあちゃんの事を、何かの形で残してあげ
たいと思いました。

大きな時代の流れの中で、生き抜いた事の証とし
て。



日本キリスト教団 佐伯教会

川村益子姉略歴

・一九一八（大正七年）九月十日誕生

・一九三五（昭和十年）

大分県立佐伯高等女学校卒業

・一九三八（昭和十三年）

佐伯メソジスト教会（現日本キリスト教団

佐伯教会）にて洗礼

大入島小学校教員・栄光園保母

瑞穂学園保母歴任

・一九七〇（昭和四十五年）

夫・川村猛逝去

・二〇〇三（平成十五年）九月

南海病院に入院

・二〇〇三（平成十五年）十二月

逝去 八十五歳